



筑摩世界文學大系

57

プルースト

I

井上究一郎 訳



筑摩書房

筑摩世界文學大系 57

昭和四十八年七月十日 初版第一刷発行

昭和四十八年十月五日 初版第三刷発行

ブルースト I

訳者 井上 究 一 郎

発行者 井上 達 三

発行所 東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房

郵便番号一〇一―一九一
電話東京(二九一)七六五一
振替口座東京四一―二三

整版 井村印刷 印刷 多田印刷 製本 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0397 (製品) 20657 (出版社) 4604

目次

失われた時を求めて

井上究一郎訳

第一篇

スワン家のほうへ

3

第二篇

花咲く乙女たちのかげに

279

解説

井上究一郎

617

失われた時を求めて

第一篇 スワン家のほうへ

ガストン・カルメット氏に

深くあつい感謝の
しるしとして、

マルセル・ブルースト。

第一部 コンプレー

一

長いあいだに、私は早くから寝るようになった。ときどき、ろうそくを消すとすぐに目がふさがって、「これからほくは眠るんだ」と自分にいうひまもないことがあった。それでも、三十分ほどすると、もう眠らなくてはならない時間だという考に目がさめるのであった。私はまだ手にもったつもりでいる本を置こうとし、あかりを吹きけそうとした。ちらと眠ったあいだも、さつき読んだことが頭のなかをめぐりつづけていた、しかしそのめぐりかたはすこし特殊な方向にまがってしまつて、私自身が、本に出てきた教会とか、四重奏曲とか、フランソワ一世とカール五世の抗争とかになつてしまつたように思われるのであった。そうした気持は、目がさめて、なお数秒のあいだ残っていて、べつに私の理性と衝突するわけではなく、何かうろこのように目にかぶさつて、すでにろうそく台の火が消えていることに気づかせないのであった。やがてそうした気持も、つかみどころがないものになりはじめた、あたかも輪廻のあとに、

前生での思考がわからなくなるように。書物の主題は私から切りはなされ、私とその主題に熱中するもしないも、私の自由なのであった。まもなく私は視力をとりもどし、周囲が暗闇なのでびっくりするが、私の目には快くやすらかな闇であつた。目にもそうだが、私の精神にはおそろくもつとそうだったにちがいない、何か原因のない、わけのわからないもの、まったく朦朧としたもののように思われた。一体何時だろうと私は心にたずねるのであった。通つてゆく汽車の汽笛がきこえ、その汽笛は、遠くまた近く、森のなかの一只の鳥の歌のように、移つてゆく距離を浮きたたせながら、さびしい平野のひろがりを私に描きだし、そんな広漠としたなつかを、旅客はつぎの駅へといそぐのだ、そして彼がたどっているささやかな道は、訪れてきた新しい土地、不慎れな経験、この夜のしじまのなかでなおも彼を追つてくるよその家のともしびのもとで交した先刻の雑談やわかれの挨拶、間近にせまつた帰宅のなごやかさ、そうしたものからかきたてられる興奮によつて、彼の回想のなかに深くさみこまれようとしているのだ。私は頬をおしつるのであつた、私の枕の美しい頬に、まるくふくらんで新鮮な、われわれの子供のころの頬のような、枕の頬に。私はマツチをするのであつた、私の懐中時計を見るために。まもなく十二時だ。それは、病気の人がやむなく旅に出て、見知らぬホテルに寝たのだから、発作で目をさまし、ドアの下に夜あけの光を一筋認めてはつとする時刻だ。よかつた、も

う朝だ！ 使用人たちが起こされるのもすぐだ、ベルもおせる、たすけにもきてくれる。案になれると思つと、苦しみに堪える勇気がわく。折から足音がきこえたように思つた。足音は近づき、やがて遠ざかる。そしてドアの下の夜あけの光の筋が消えた。十二時なのだ、ガス灯が消したところなのだ。最後の使用人は行つてしまつた、そしてそのまま、夜通し苦しまなくてはならないだろう、手当も受けずに。

ふたたび私は眠りこむのだ、そしてそれから、ときどき目がさめることはあつても、一瞬のあいだ、板張の干割れる音をきいたり、目をあけて暗闇の万華鏡を見つめたり、すべてものが陥っている睡眠をちらと意識にさしこむ光で味わつたりするだけで、そのあとは、家具、部屋、その他のすべて、私もまたその小さな一部分であるそうしたすべてのものが陥っている睡眠の無感覚に、私はすぐにもどつて合体するのであつた。あるときはまた、眠っているあいだに、私の幼年の、永久に過ぎさつたある年齢にやすやすと達して、そのころのたわいもない恐怖、大叔父に巻毛をひっぱられようとする恐怖のようなものをふたたび感じたが、そうした新しい時代がはじまる日づけとなつたそのときに——消えてしまつたものなのであつた。眠っていたあいだは、巻毛を切つた事件のことは忘れていたのであつて、大叔父の手からのがれようとしてうまく目をさましたとたんに、事件のことが思いだされるのだが、それでもまだ私は

大事をとって、頭をすっきり枕にくるんでから、ふたたび夢の世界にもどってゆくのであった。

ときには睡眠の途中で、あたかもアダムスの肋骨からイヴが生まれたように、一人の女が私の腿の寝ちがえの位置から生まれてきた。その女は私自身が味わおうとしていた快感から形成されたものであるのに、その女が快感を提供してくれると私は想像するのであった。私の肉体はその女の肉体のなかに私自身の体温を感じ、その女の肉体と一つになろうとし、そこで私は目がさめるのだ。たったいま離れてきたこの女にくらべると、ほかの人間ははるかに遠いような気がした。私の頬は彼女のくちづけでまだあつく、私の肉体は彼女の体重でぐったりしていた。彼女の顔立がどこかで私に見おぼえがある——そういうことがときには起こった——そんな場合は、その女を見つけたそう、という目的にしばらく全力をあげた、たとえば、宿望の都市を自分の目で見ようと旅行に出る人たち、夢想の魅力を現実の場所で味わうことができると想像している人たちのように。だんだんその女の回想は消えさり、いつしか私はその夢の娘を忘れてしまうのであった。

眠っている人は、時間の糸、歳月や自然界の秩序を、自分のまわりに輪のように巻きつけている。目をさますとき、その人は本能的にそうしたものにあたってみて、自分が占めている地点と、目がさめるまでに流れさった時間とを、瞬時のうちにそこに読みとるのだが、そうした糸や秩序の系列は、よくもつれたり切れたりすることがある。ある人が、なぜか眠れなくて、あけがた近くなり、本を読みながら、いつもの眠る姿勢とはひどくちがった姿勢でねむりに襲われるとすれば、その人の片腕がもちあげられさせたりすることがあるので、目がさめた最初の瞬間には、時間がもうわからなくなったり、たったいま寢床にいたばかりだと思ったりするだろう。さらにもっと工合のわるい、変わった位置、たとえばある人が夕食後、肘掛椅子に腰かけてまどろむとすれば、そのとき、脱線した自然界のなかに完全な顛倒が起こり、魔法の肘掛椅子がその人をのせて時間と空間のなかを全速力で駆けめぐらるだろう、そして臉をあけてみると、その人は他国で数か月もまえに寝たような気がするだろう。しかし私の場合は、そんな位置でなくても、ベッドそのものに寝ていて、睡眠が深くなり、精神の緊張が完全にゆるむだけで十分だった。そのとき、私の精神は、自分が眠りこんだ場所のわきまえをなくしていた。そのようにして真夜中に目がさめるとき、自分がどこにいるのかわからないので、最初の瞬間には、自分が誰なのかを知らないことさえあった。私は動物の体内にうごめくような生存の感覚を、その最初の単純性のなかで保っているにすぎなかった。私のなかにあるものは穴居人よりもっと欠乏していた。しかしそのとき、回想が——いま私のいる場所の回想ではなく、かつて住んだことがあったいくつかの場所、またはいくか行ったことがあったらしいいくつかの場所の回想が——天上からの救のように私にやってくる、自分ひとりでは抜けだすことができない虚無から、私をひきだしてくれ、私は一瞬のうちに文明の数世紀をたびこえ、そして石油ランプの、ついで折襟のワイシャツの、ぼんやりと目に浮かぶ映像によって、すこしずつ、私の自我に独特の諸特徴を再構成するのであった。われわれのまわりにある事物の不動態は、おそれなく、それらがその事物であって他の何物でもないというわれわれの確信、つまりその事物に向かつてのわれわれの思考の不動態によって、それらにおしつけられているのであろう。ともかくも、そんなふうにして目がさめるとき、私の精神は、どこに私がいるかを知らうとして、うまく行かないで、やっきになってもがき、私のまわりのすべてが、物が、土地が、歳月が、暗闇のなかでぐるぐるまわるのであった。私の肉体は、ひどくしびれていて動くことはできないが、その疲れの型に応じて、手足の位置の目星をつけ、そこから壁の方向や家具の場所を割りだし、いまいる住まいを再構造し、その住まいを名ざそうとつとめるのであった。肉体の記憶、肋骨、膝、肩の記憶は、かつてその肉体が眠った数々の部屋をつぎつぎに肉体に現前させた。一方肉体のまわりには、目に見えない壁が、想像された部屋の形に応じて場所を変えながら、暗黒のなかで渦を巻いた。そして私の思考が、時代や形態の入口でためらいながら、周囲の事情を照らしあわせてあの宿だということを見きわめるまえに、こちら——私の肉体——は、そ

れぞれの宿について、私とその宿でねむりにはいるときにめぐらし、目ざめたときにふたたび見出した思考とともに、そのベッドの種類、ドアの場所、窓の採光、廊下の所在を思いだして察しようとして、たとえば天蓋つきのひろいベッドで壁に顔を向けて横たわっていることを思いうかべる、とすぐに私は自分についているのであった、「おや、ママがぼくにおやすみを言いにこなかったのに、眠ってしまっただな。」そんな私は、田舎の、何年もまえに亡くなった私の祖父の家にいるのであった。私の肉体、私が下にして寝た脇腹、それら、私の精神がけっして忘れることはなかったであろうある過去の、忠実な保管者たちは、天井から鎖でつるされている壺形のボヘミア・ガラスの有明ランプの炎とか、シエナ大理石の暖炉とかを私に思いださせるのであって、それらがあったのはコンプレーの私の寝室、私の祖父の家での、遠い昔の日なのだが、いまそれらは、正確に現前させることはできなくても、現在のこのように思いうかべられるのだ。そしてやがて私がすっかり目をさましたときには、それらはもっとはっきり見わけられるだろう。

それからまた、新しいべつの姿勢の回想がよみがえった。壁はこんどはちがった方向にすべりだし、私はサン・ルー夫人の田舎の家、私にあてられた部屋にいたのであった。しまった！ もう十時にはなっているだろう、みんなは晚餐をすませたにちがいない！ 仮寝が長ず

ぎてしまったらしい、夕方にはいつも、サン・ルー夫人との散歩から帰ると、晚餐の服を着るまえに、私は仮寝をする。というのも、コンプレーで過ごして以来、多くの歳月を経るようになったからだ。コンプレーでは、私たちの散歩のかえりが一番おそいときでも、私の部屋の窓のガラスに、まだ夕日の赤い反射が見られたものだった。タンソヴィルの、サン・ルー夫人の家での生活は、それとまたようすがちがいが、私が見出したのしみも、そのようすがちがっている、すなわち、夜になってからしか外出せず、昔私が目を浴びてあそんだあの道を、いまは月光を浴びてたどる、そしてその散歩のかえりにランプのあかりがもれている私の部屋、夜のなかのただ一つの灯台を、遠くから私は認めるのだ。その部屋で、それからすぐに晚餐の着かえをしないで、仮寝をしようというわけなのだ。

そうした旋回する漠とした喚起は、わずかに数秒しかつづかなかった。自分がいる場所のつかのまの不確実さは、そこにさまざまな想定がはいりこんで、しばしばそれらの見わけがつかなくなったからで、馬が走るのを見ていて、映写機に映るその馬のつぎつぎの位置をわれわれが切りはなしえないのとおなじである。しかし私は、これまでの生活で住んだ部屋を、あるとき一つ、あるときはまた一つと、つぎつぎに目に再現してきたので、めざめにつづく長い夢想のなかで、ついにそれらの部屋のすべてを思いだすようになった。——冬の部屋、そこで寝る

ときは、じつに雑多なものでつくりあげた巢のなかに首をうずめてまるくなる、その巢には、あくまで鳥の技術をまねることにこだわって、枕のすみ、夜具の襟、ショールの端、ベッドのふち、《テバ・ローズ》紙の一部までが、いっしょにまぜて塗りかためたのである、その部屋では、凍るようにつめた天候でも、人の味わうたのしみは、戸外からへだてられておもしろいことだ（あたかも穴の奥の地熱のなかにその巢をもつている海つばめのように）、そしてここでは、夜通し暖炉の火を落とさないの、ときどき燃えあがる燐火のあかりをもらすあたたかけむった空気の大きなマントにくるまって眠るのだ、そんな空気のマントは、いわば触知できないアルコヴ、この部屋のまんなかにはうがたれたあたたかい洞窟で、その熱の輪郭にかこまれた圈内は、部屋のすみの、窓に近い、暖炉に遠いあたりから、私たちの顔をひやしにきてくれる風によって、換気され、燃えあがり、ゆるゆると動くのだ。——夏の部屋、ここでは、人はなまあたたかい夜に合体していたくなる、ここでは、月光が細目にあけた罅戸に寄りかかり、ベッドの脚もとまで、その魔法の梯子を投げている、ここでは、光の尖端で微風にゆすられる山雀のように、人はほとんど野外と変らない吹きさらしで眠るのだ。——ときどき、ルイ十六世式の、非常に晴れやかで、最初の晩でもさしてつらいたいをしなかった部屋、ここでは、天井を軽きささえているほそい円柱が、じつに優雅な間隔にひらいて、ベッドの位置を示し、べ

ッドに十分のゆとりを残していた。——ときどき、反対に、せまくて、しかも天井がひどく高く、ピラミッド型に二階をくりぬいたほどにそそりたち、そこどころにマホガニーが張ってあった部屋、そこでは、最初の瞬間から、私は嗅ぎなれないウエチヴェールの匂に気分をわるくし、むらさき色のカーテンの敵意と、私におかまひなしに大声でわめきたてる振り時計の傲慢な無頓着さと、すっかり屈服させられた、そこではまた、四角ばった脚の異様な無慈悲な鏡が、部屋の一隅を斜に仕切って、私の平素の視野の快いふくらみのなかに、ざっくりと切りこみ、そこに思いもかけない傷口をばっくりとあけていた、そこではまた、私の思考は、正確に部屋の形をとろうとし、その巨大な漏斗形の天井のてっぺんまで満ちてゆこうとし、何時間も、くずれたりりのびあがったりしながら、苛酷な夜毎の試練に堪えた、一方私は、私のベッドに横たわり、目をあげ、不安な聞耳を立て、鼻息をおさえ、胸をどきどきさせていた、やがて習慣がカーテンの色を変え、振り時計をだまらせ、斜を向いた残酷な鏡にあわれみを教え、ウエチヴェールの匂を完全に追いはらわれないまでもさして鼻につかないようにし、天井の目立つ高さをぐっとさげるようになるまで、である。習慣！ 巧妙な、しかしいぶん気長な調整者、それはまず手はじめに、われわれの精神を何週間も仮小屋で苦しみに堪えさせる、しかし何はともあれ、習慣を見出すことは、精神にとつてまことにしあわせだ、なぜなら、習慣というも

のがなく、精神の手段だけによるとしたら、われわれの一つの宿に落ちつかせるのはとうていむりだろう。

なるほど、私はもうはっきりと目をさまして、私のからだは最後の寝がえりをうちおわり、確実性をつかさどる天使が、私のまわりのすべてのものを停止させ、私を私のベッドの夜具に寝かせ、私の箆筒、机、暖炉、表通に面した窓、二つのドア、そうしたものを、闇のなかで、ほほその所定の場所に置いてしまった。しかし、そうやって、私があのままな住まいに——目がさめるときの不可知の状態で、一瞬のあいだ、私がその明瞭な映像を思いうかべないまでも、すくなくともそれらしいと思つたあのままな住まいに——身を置いているのではないことを知つても、そのことは問題ではなかった。私の記憶には、もうはずみがつけられていた。そうなる、たいして私は、すぐにはふたたび眠ろうとせず、昔の私たちの生活、すなわちコンブリーの大叔母の家や、バルベックや、パリや、ドンシニールや、ヴェネチアや、さらに他の場所での生活を思いだし、さまざまな土地、そこで知りあつた人たちが、その人たちについて見たことやきかされたことを思いだし、夜の大部分を過ごすのであつた。

コンブリーでは、毎日、夕暮になると、母や祖母から離れてベッドにはいったまま眠らずにじっとしてはなくてはならない時間にはまだ先が長いのに、その寝室が私の気がかりの苦しい

固定点になるのであつた。なるほど、私があまり不機嫌なようすをしている晩は、私の気をまぎらせるために、みんなは私に幻灯を見せることを考へついていた、そして夕食の時間を待つあいだに、それを私のランプに仕掛けてくれた、するとその幻灯は、ゴチック時代の早い時期の建築師兼ステインド・グラスの頭領たちにならう、部屋の不透明な壁を、触知できない虹色のかげやき、多彩な超自然の幻に置きかえ、そこにあらわれるいろいろな伝説は、あたかもちらちらゆれて瞬間に消えるステインド・グラスに描かれているかのようにあつた。しかし、そのために、私の悲しみは増すことにしかならなかつた、なぜなら、照明の変化だけで、私が身につけている自分の部屋の習慣がこわされたからであり、そんな習慣のおかげで、就寝の苦しみを除けば、私の部屋はがまんができるものになつていた。ところが、いまはもう自分の部屋がよそよそしく、そこにいて不安になつてきた、汽車からおりてはじめて着いたホテルの部屋が、「山荘」の一室にでもいるように。

乗つた馬のぎくしゃくした並足に連れて、おそろしいくらみに満ちたゴロが、丘の斜面を暗緑色のピロードのように見せている三角形の小さな森から出てきて、おどろきながら、あわれなジュスヴィエーヴ・ド・ブラバンの城に向かつて進んでいった。その城は一つの曲線で断ちきられていたが、その曲線というのは、ほかでもない、幻灯の溝にすべりこませる枠にとりつけた、楕円形のガラスの原板のふちなの

であつた。つまり城の一翼だけが見えているので、その前方に原野があり、そこには青いペルトをしたジュヌヴィエヴが夢想にふけつていた。城と原野とは黄色だったが、私はそれらを見てからでなくとも、その色がわかつてから、というのも、原板を柵にとりつけるまえから、ブラバンという名の金褐色のひびきが、自明の理のようにその色を示していたから。ゴロは一瞬立ちどまつて、大叔母が声高に読みあげる口上を不機嫌そうにきき、すっかりのみこんだという顔をした、ある種の威厳を落とさない素直さで、台本の指示にその動作をあわせながら、ついでおなじじやくした並足で遠ざかった。ところで、その悠々たる騎行をとめることができるものは何もなかったのだ。人が幻灯を動かすと、ゴロの馬は、窓のカーテンの上を、その襞のところまでりあがつたり、そのくぼみに駆けおりたりしながら、前進しつづけるのがはつきり私に見えた。ゴロ自身からだは、乗っている馬のからだとおなじように超自然な要素でできていて、途中に横たわるすべての物的障害、すべての邪魔物をうまく処理して、それを自分の骨組のようなものにし、それを体内にとりこんでしまい、たとえそれがドアのハンドルであっても、彼の赤い服、または青白い顔は、ただちにそれにびつたりとあい、またその表面にぼっかりと浮かびあがつて、その顔は、いつまでもおなじように高貴で、おなじように憂鬱だが、そうした脊椎骨移植のどんな苦痛をあらわすこともなかった。

なるほど、私はそんなきれいな映写の光に魅力を感じた、それはメロヴィンガ王朝の過去から発するように思われ、私のまわりにあの古い歴史の反映をさまざまさせた。しかし、それにして、いつのまにか私の自我で満たしきつても、自我そのものにはたいするおなじようにはや注意をはらわなくなつた部屋への、そんな神秘と美との侵入は、いうに及ばないあるいやな気が私に起こさせたと、習慣というものの麻醉力が利かなくなると、私はあれこれの物を非常に陰気に考えたり、感じたりしはじめるのであつた。私の部屋のドアのそのハンドルにしても、まわす必要がなく、ひとりでにあくように思われた、つまりそれほど私には取扱が無意識的になつていた、という点で世界中の他のドアのハンドルとは私にとって異なつていたのに、いまそれがゴロの霊体の役をしているように思われた。そして、夕食のベルが鳴ると、ゴロにも「青ひげ」にもなじみはなくて、私の家の人たちやビーフ・シチューのことはよく知っている大きな釣ランブが、夜の光を投げている食堂に、私はいそいで駆けこみ、ママの腕のなかに倒れるのだが、ジュヌヴィエヴ・ド・ブラバンの不幸がママを私にいっそう親しく感じさせ、一方ゴロの罪は、私にいっそうこまごまと私の良心をせんざくさせるのであつた。

夕食後は、悲しいことに、まもなく私はママのそばを離れなくてはならなかつた、そのママはあとに残つてほかの人たちと雑談をするのだから、天気がいいときは庭で、天気がわるいと

きはみんながひきさがる小さなサロンで。みんなといつても私の祖母はべつで、祖母の考は、「田舎にいて部屋にこもつてじつとしてゐるなんて、なさないわね」であり、雨のひどい日には、私の父が私をそこに出さないで部屋へ読書にやるから、彼女はそんな父とはてしない議論をした。「それではいけないというのですよ、あなたがこの子を頑丈な強い子になさるには」と彼女は悲しそうにいうのであつた、「とりわけこの坊やが体力と気力をつけることがたいせつな子だのに。」私の父は両肩をそびやかして、それから晴雨計をながめる、彼は氣象学を好んでいるのだ、そのあいだ私の母は、そうした父の心を乱さないために、物音を立てることを避け、敬意をこめてうっとり父をながめるが、しかしあまり強く見つめて父の優位の秘密を見通すことはさしひかえていた。しかし私の祖母はというところ、どんな天候でも、たとえ雨がはげしくふつてきて、フランソワーズがぬらしては一大事とたいせつな柳の肘掛椅子をあわててとりこんでしまつたあとも、驟雨にたたかれて、誰も人のいない庭のなかで、灰色の乱れた髪をかきあげながら、健康のためになる風や雨をもつとよく顔にしみこませようとしている姿が見られた。彼女はいうのであつた、「やっ」と、これで息がつける！」そして、ずぶぬれの庭の小道をあちこち歩きまわつた——それらの道筋は、自然にたいする感情というものを全然もつていない新しい庭師の勝手な考で、あまりにも対称的につけられていたが、その庭師に私

の父は、きょうの天気はよくなるだろうかと、しきりに朝からたずねていたのであった——そんな祖母の、夢中で、ぎくしゃくした、小さきあな足どりの、あなず色のスカートに泥はねをあげまいとする知らず知らずの心掛にしばらくたというよりも、むしろ強い雨風への陶醉、衛生の効能、私への教育のおろかさ、あまりにも対称的な造園法によって、彼女がかきたられたさまざまな心の動きにあわせたものであったから、スカートは上のほうまで泥はねに被われてしまい、それがいつも彼女の小間使の泣言と頭痛の種になるのであった。

夕食後祖母がそんな庭めぐりをやるとき、一つだけ彼女を家に帰らせる効能をもったものがあつた、それは——彼女の散歩の循環が、カルタ・テンプルの上リキエールが出されている小さなサロンのあかりの正面に、蛾のように周期的に彼女を連れもどすときを見はからつて——私の大叔母が、「バチルド！ とめにいらつしやい、ご主人がコニャックをお飲みですよ！」と祖母に叫ぶことなのであつた。大叔母は、じつは祖母をからかうために（というのも祖母は、私の父の家庭にひどく異質の精神をもちこんでいたので、みんなが彼女をひやかし、こまらせていたのであつて）、リキエールが祖父に禁じられていたのに、その少量を彼に飲ませるのだ。かわいそうに、祖母は部屋にはいつてきて、その夫に、コニャックを飲まないで、まわすに懇願したが、夫はかわい顔をして、かまわずにぐつとのみこむのであつた。祖母は悲

しみ、落胆して、また出ていくのだが、それでも顔はほほえんでいた、というの、彼女は非常に心がつつましく、非常にやさしかったので、他人への愛情と、自分の身や自分の苦しみのへの軽視とが、そのまなざしのなかで調和してほほえみとなるからで、そのほほえみには、それが多くの人間の顔に出る場合とは逆に、皮肉は彼女自身にしか向けられず、私たちみんなから見れば、彼女の目のくちづけのようなものしかあらわれていなかった。彼女の目は、彼女がかわいがっている人たちを、まなざしではげしく愛撫することなしにはながめることができなかったのだ。私の大叔母が祖母に加えたそんなひどい仕打、祖母がはじめからあきらめたかのように祖父からリキエール・グラスをとりあげることができないで空しく懇願するその弱気の光景、それらはやがては見慣れるもので、はては平気で笑いながらながめ、こんどはむしろ積極的にもしろがっていいじめる側についてしまひ、自分ではいじめているのではないときえ思ひこむようになるものであつたが、当時の私にはひどい嫌悪感をあたえ、私は大叔母をひっぱたいてやりたかつた。しかし「バチルド！ とめにいらつしやい、ご主人がコニャックをお飲みですよ！」を耳にすると、卑怯の点ではすでに大人であつた私は、われわれが大きくなるとみんなよくやること、目のまえに他人の苦しみや不正があるときによくやることをした、つまり私はそれらを見ようとしなかつたのだ。私は家のてっぺんにあがつていって、勉強部屋の脇

にくつついた、屋根うらの、ある小部屋ですすり泣いた。臭気止のアイリス香が匂うその小部屋には、また野性の黒ずりが匂っていたが、その木は高い石垣のあいだから生えて、花のついた一枝を半びらきの窓からさしこんでいた。ほんとうはもつと特殊な、もつと下品な用途にあてられていたが、ひるはそこからルーサンヴィル・ルパンの楼閣まで見わたせたその部屋は、長いあいだ私のためにかくれ場所の役をはたした、なぜならそれはおそらく、私が鍵をかけてはいつていることのできた唯一の部屋であつたからだろう、すなわち、誰にも侵されはならない私の用事、読書とか、夢想とか、すすり泣きとか、快楽とか、そんな場合のすべてに使われたのである。ああ！ 私は知らなかつたのだ、午後や夕方に、祖母が休みなしにぐるぐる庭をめぐっていたあいだ、その夫のわずかな不摂生よりも、私の意志の欠乏、私の虚弱な体質、それらが私の将来に投げかけていた不安のほうか、はるかに悲しく彼女の思いを占めていたことを。そして空に斜にあげたまま私たちのまえをくりかえし過ぎてゆく彼女の気品のあつた顔を見ると、その褐色の、しわのよつた頬は、鋤きおこされた秋の畑のように、更年期のためにほとんどモイブ色になっていて、そとに出るときはすこし高目にあげた小さなヴェールにかくされるその頬の上には、きむぎのためか、それとも何か悲しい思いにさそわれてか、知らず知らずに流れた涙の一しずくがいつも乾こうとしていた。

寝にあがってゆくときの、私の唯一のなぐさめは、やがて私がベッドにはいつたあとでママが接吻をしにきてくれるだろう、ということであつた。しかしそのおやすみはほんのわずかのあいだしかつかず、彼女はすぐまた下におりてゆくので、私が彼女のあがつてくる音を耳にしてから、二重ドアの廊下に、編んだむぎわらの小さなかざりひもがさがっている青いモスリソンの彼女の庭着の軽い衣ずれの音がつたわつてくる瞬間は、私にとつて胸がつまるような瞬間であつた。それはやがてそれにつづく瞬間、彼女が私から離れた、ふたたびおりていってしまう瞬間を告げていた。だから私は、そんなに自分の恋しいその幸福が、できるだけおそくやつてきて、ママがまだやつてこない猶予の時間が長びくように、とねがうようになった。ときどき、接吻してからドアをあけて出てゆくこととすると、彼女を呼びかえしたくなり、「もう一度接吻して」と言いたかつた、しかしすぐにいやな顔をされることはわかつていた、なぜなら、私の悲しみや興奮に彼女が譲歩して、私を接吻するために上にあがり、あのミサ聖祭の親睦のくちづけを私につたえることは、そんな儀式を愚劣だと思つてゐる私の父をいらだたせていたからであり、母もそんな欲求、そんな習慣を、つとめて私になくさせるようにしたいと思つてゐたのに、すでにドアのところまで行つたときに、もう一度くちづけをせがませるような習慣をゆるすはずはなかつたからであつた。とここで、そんないやな顔をする彼女を見れば、一瞬まえ

に、彼女が愛のこもつた顔を私のベッドのほうにかしげたときに、そしてまたさきほど、あたかも親睦の聖体拝領で私の唇が彼女の真の臨在と私への安眠の効力をとくみとることのできたときに、彼女が私にもたらしめたあの安静は、すべてこわされてしまふのであつた。しかし、そのような晩、つまりママがほんのわずかしか部屋にいてくれないそのような晩も、夕食に客がきていて、そのために彼女が私におやすみを言いにあがつてこない晩にくらべると、まだしも心やすらかだつた。客といつてもふだんはスワン氏にかざられていて、通りすがりに立ちよつてゆくよその人たちを除けば、それがコンプレーの私たちの家に来たほとんどの唯一の人で、ときには隣人として夕食に（それもあのふしだらな結婚をしてからは、ずっとまれになつたのであつて、私の家族は彼の妻を招きたがらなかつたのだ）、またときには夕食後に、ふいに、やつてきた。家のまえの、大きなマロニエの下で、みんなが鉄のテーブルをかこんで休んでゐる晩に、庭のはずれで呼鈴の音がきこえる——通るたびに、とめどのない、つめたい、鉄のひびきをふりまいてうるさいので、家の人はみんなはずして「鳴らさずに」はいることにしてゐたあの大げさなかん高い鈴の音ではなくて——それはよその人たちが鳴らすための、臆病な、まるい、金の音色の、二つずつびく小鈴の音なので、みんなはすぐに、「お客さんだ、一体誰かしら？」と各自の心で問うのだが、それは

スワン氏でしかありえないことがよくわかつていた。大叔母は手本を示すために、つとめて自然にきこえる口調で、声を高めて話しながら、そんなにひそひそとささやいてはいけなかつた、きいてはならない話合の最中なのだとその人に思わせる、というのであつた。それから祖母が斥候に出されるのだが、祖母はもう一度庭をまわる口実ができればいつもごきげんで、その機会を利用して、通りすがりにこつそりばらの植込の副木を何本かひきぬぎ、ばらの花をすこし自然な姿にもどしてやるのだった、あたかも床屋であまりびつたりなでつけられた息子の髪に手を入れて、ふっくらさせてやる母親のよう

に。私たちはみんな緊張して、祖母がもたらす敵の情報待ちうけていた、あたかもわれわれが多数とおぼしい奇襲部隊にはさまれて、どうしたらよいか迷つたときのように。するとしばらくして私の祖父がいうのであつた、「あ、スワンの声だ。」そういえば、彼とわかるのは声からだけなので、蚊をよせつけないために庭はできるだけあかりをなくしてあつたから、ほとんど赤毛に近いブロンドの髪を、ブレッサン風に刈りあげた高い額の下に、鷲鼻とみどりの目をもつた彼の顔立は、家の人たちにもよく見わけがつかなかつた。シロップをもつてくるようにと言いつけに、私はさりげなく席を立つた。祖母は、そんなふうにさりげなくするほうが好ましいと考へていて、例外的に、客のあるときに

だけ、シロップが出るように見えてはならないことを非常に重要視していた。スワン氏は年はるかに下であったが、私の祖父とは非常に親密だった。祖父はもともとスワン氏の父親の親友の一人なのであった。その父親という人は、傑物であったが変っていて、ときどきなんでもないことが完全に彼の心の飛躍をさまたげ、思考の流を変えてしまうことがあったらしい。私は何度となく食卓で祖父からいつもおなじ逸話をきかされたが、それはその父親という人がひるも夜も看病したその妻に死別したときの態度についてであった。長いあいだその人に会っていなかった私の祖父は、コンブレー近在のスワン家の所有地にいる彼のもとに駆けつけた、そして納棺の場を見せないように、涙にかきくれている彼を、やっとうまく、なきがらのある部屋から、しばらくそとに連れ出すことができた。二人はわずかに日がさしている庭に足をふみいれた。突如として、スワン氏の父親は私の祖父の腕をつかんでこう叫んだのであった、「やあ！なんともうれいんですね、あなた、こんないいお天気にいっしょに散歩できるなんて！きれいな木もどきさし、そして私のつくった池、まだおほめにあずかっていますね？ あなたはなんだかふさぎこんでいますね。どうです、このそよ風は？ やあ！ なんといいたって、やはり生きていることです、いいところがありますよ、ねえ、アメデさん！」そのとき急に死んだ妻の思出がよみがえったが、なぜこんなときによるこ

びの衝動にさそわれたかを追求するのは、おそらくめんどうくさいという気がしたのであろう。彼は結局、むずかしい問題が頭に浮かんだときにくせになっている動作、片手を額にやり目と鼻めがねのレンズとをぬぐう動作だけでやめたのであった。それでも、妻の死をあきらめることはできなかった、しかし彼女のあとに生きながらえた二年のあいだに、私の祖父によくこういった、「変なものです、かわいそうな家内のことはよく何でも考えるのですが、どうも一度にたくさんは考えられないのですよ。」それ以来、「何度も、しかし一度にすこししか、スワンの死んだ親父式」というのが祖父のおはこ一つになって、ひどくかけはなれた事柄についてもそれが口に出るようになった。そんなスワンの父親は、まるで怪物だと私には思われたかもしれない、もし祖父が声を強めてこう言いかえさなかったら、「なんだって？ あれは美しい心の人だったよ！」その祖父を私は最高の裁判官だと考えていたし、彼の判決は私にとっては判例となり、そのちも人の過失をゆるすのに何度も役立つのであって、そうでなかったら私はすぐに処罰に傾いただろうと思われる。

多年にわたって、私の大叔母や祖父母たちが気づかなかつたのは、息子スワン氏を送っている生活で、彼はそのあいだに何度も——といっても、とくに彼が結婚するまえのことだが——コンブレーで私の大叔母や祖父母たちを訪ねてきたのだが、パリでは自分の一家が以前に

つきあっていた社会にはもはや出入りしていなかったものであった、そしてこのスワンという名は彼が私のところで使っているおしのびの名のようなものであり、私の家ではそんなおしのびの彼を客として——たとえば、それと知らずに有名な盗賊を泊めている正直なホテルの主人の罪のなざで——むかえていて、じつはその客がジョッキークラブのもつとも粋な会員の一人、パリ伯爵やプリンス・オヴ・ウェールズのお気に入り友人、フォーブール・サン・ジェルマンの上流社交界の寵児の一人であることに気づかなかつたのである。

スワンが送っているそんながやかしい社交生活について、私たちが何も知らなかったのは、もちろんある点まで彼の性格の控目やつつしみ深さによるのだが、また一つには当時のブルジョワたちが、社会について多少インディ的な考えかたをしていたことにもよるのであって、彼らの考によれば、社会は閉鎖的なくつつかのkastトから構成され、各人は生まれたときから両親が占めている身分に位置づけられ、例外的な経歴または思いがけない結婚といった偶然によるのでないかぎり、そのkastトから離れて絶対に上位のkastトにはいることができないのであった。父親のスワン氏は株式仲買人だった、だから「息子のスワン」は、納税者の一覧表で見られるように、所得に応じて財産が変動するようにな一つのkastトに生涯を通じて属することになっていた。自分の父親の交際がどうであったかはわかってはいた、したがって、息子としてのそ

れがどうであるべきか、自分がいまだどんな人たちとまじわる「立場」に置かれていられるかもわかっていた。それ以外の人たちと彼がつきあうとすれば、それは若い世代のつながりで、彼の一家の古い友人たち、たとえば私の家の者などは、スワンが父親を失ってからもしきつづき非常に忠実に私たちを訪ねてくるだけに、それだけ好意的にそうしただけの若いつながりには目をつぶっていた。しかし私たちの知りあいではなく、彼が若いつながりで会っていた友人たちは、私たちのいるままで彼がその人たちに会ったとしたら、彼から挨拶をしようとは思わないような友人たちであったことにまちがいはない。スワンの両親と同等の地位にあった株式仲買人の他の息子たちのあいだにスワンを置いて、彼に固有の社会的係数をむりにも彼に適用しようとする段になると、その係数は彼の場合いくらか低いものになったかもしれない、というのは、気取りがなくじつにさっぱりとした性格の、ずっとまえから骨董品と絵画に「熱をあげ」てきたような人間であり、いまはある古めかしい邸宅に住んで、そこに彼のコレクションをつみあげていくというそんな生活をしていたからで、私の祖母には一度そこを訪れたいというのが夢であったが、その邸宅はオルレアン河岸にあって、そのあたりは私の大叔母が住むのもけがらわしいと思っている区域なのであった。「すこしは目がお利きですか？ あなたのためを思っておたずねするのよ、だっていかものをつかまされたいらっしゃるにちがいないのですもの、商売

人から」と大叔母は彼にいうのであった。まったくその通りで、彼女は彼にりっぱな鑑識があるとは思ってはいなかったし、会話でまじめるな話題を避ける男、単に料理のつくりかたを微細な点にわたって私たちに説明するときばかりでなく、祖母の妹たちが美術のことを主題にするときでも、ひどく散文的な正確さを披瀝する男にたいしては、知的な見地からいっても、高い判定をくだすわけには行かなかった。祖母の妹たちから、ある絵についての意見をきかせてくれるようにうながされても、彼はなんとなく無愛想にだまりこくっていた、そしてその埋めあわせをするとしたら、かえってその絵のある美術館、その絵の描かれた年代、といった点についての具体的な消息をつたえることができるところの場合にかぎられていた。しかしふだんの彼は、私たちが知っている人間から彼を選んできた、たとえばコンブレーの薬屋、私たちの家の料理女、私たちの馭者と、彼とのあいだにあったばかりの新しいいきさつを、訪問のたびに話題にしながら、私たちをおもしろがらせようとすることで満足していた。なるほど、そうした話は大叔母を大いに笑わせた、しかしおもしろいのはスワンがいつもそこでこっけいな役を演じているからなのか、それを話すときにスワンが機知をはたらかせるからなのか、彼女にははつきりしなくて、「ほんとは」と変ったかたというの、あなたのことでしょうね、スワンさん！」彼女は私たちの一家で唯一の少々俗っぽい人間であ

ったから、よその人たちとのあいだにスワンのうわさが出ると、その人たちにわざわざこんな指摘をするのであった、——あのかたは、その気になれば、オースマン大通にでも、オペラ通にでも住めた人であり、四、五百万は残したにちがいないスワンさんの息子でありながら、物好きでそうしているのだ、と。物好き、その点を大叔母はまたほかの人たちにも大いに座興になるだろうと判断したのであって、スワン氏がパリで元日におきまりのマロン・グラッセの包を彼女のためにもつてくるとき、その場に客がいると、かならずスワン氏にこういった、「それはそうと！ スワンさん、あなたはやはりお酒の専売倉庫のお近くにお住まいですか、リヨ線でお発ちになるときは、汽車に乗りおくれなくていいでしょうね？」そういつて鼻めがね越しに、ちらりと他の訪問客のほうをながめるのであった。

しかし、そんな大叔母に向かって、息子のスワンの身分であるかぎり、どんな「りっぱなブルジョア社会」からも、パリでもっとも重んじられている公証人や代言人からも、招待を受けるだけの完全な「資格をもっている」このスワンが（そんな特権を彼はあっさりゆずっていてもいいといういくぶん投げやりな気持になつていように見えたが）、こっそりと、まったくべつ生活を送っていることを告げたり、またこのスワンが、帰って寝ることにしましょうと私たちにいったあと、パリの私たちの家を出ながら、表通をまがったと思うとひきかえし、仲買人や

仲買人の仲間がけっして目にしなかつたようなサロンにはいつてゆくことを告げる人があつたとしたら、私の叔母にはひどく意外な気がしただらう、たとえそれは、もつと文学的教養のある婦人が、『ゲオルギカ』のアリストアイオスとまるで個人的に結ばれているかのように自分を考へる場合に似ていたのであつて、そのアリストアイオスは、彼女と話をまじえたあとは、人間界では目に見られない国、ウエルギリウスに描写ではアリストアイオスが大歓迎されることになつてゐる国、すなわちテティスの住む水の王国のまんなかへ、やがてざんぶりととびこんでゆくのだが、そのことがわかつたら、その婦人はひどく意外な気がしただらう。あるいはまた、たとえそれは、大叔母の頭にもつとよく浮かびそうな映像にとどめるなら——というのは、コンプレーでプチ・フルを盛る私たちの菓子皿に、そんな場面が描かれているのを彼女は見ていたからだ——彼女がアリッパバと夕食をとともにすることになつた、と考へる場合に似ていたのであつて、そのアリッパバは、やがて自分かひとりきりになつたと知ると、誰にも気がつかれない宝物で目がくらむばかりの洞窟にはいるこんでしまふだらう。

ある日、パリで、夕食後、夜会服のままのことわりながら、スワンが私たちを訪ねにきたことがあつたが、そんな彼の帰つていつたあとで、フランソワーズが、馭者からきいたといつて、スワンが「ある大公夫人のところへ」晚餐をきてきたのだともしたのいたいで、

うでしよう、くろうと筋の大公夫人のところへね！」と叔母が、両肩をそびやかしながら、編物から目をあげずに、すまし顔の皮肉で答えたことがあつた。

だから、私の大叔母は、彼にはぶつきらぼうにふるまつてゐた。彼女は私たちの招待がスワンの気をよくしてゐるにちがいないと信じていたので、夏に訪ねてくるときは、彼がその庭の桃や木いちごのかごをさげてこないことはなかつたのも、イタリヤ旅行から帰るたびに、古い名作の写真を私にもつてきたのも、まったく当然だと思つてゐた。

はじめて家にくるたいせつな人たちの相客をつとめさせるにはまだ十分な威信がないといふので、スワンを招待してゐない大きな晩餐会のときでも、グリビッシュ・ソースやパイナップル・サラダのつくりかたのちよつとしたことが必要になると、遠慮なく彼を呼びに行かさせた。会話がたまたまフランス王家の諸公のことになると、「どうてい、お近づきになれないかたがたですわ、私たち、あなたにも私にもね、つまらないじゃありませんか、そんなお話」と大叔母はスワンにいつたが、そのスワンは、ポケットにトウィックナムから発信の手紙の一つをひそめていたかもしれないのであつた。祖母の妹が歌をうたう晩には、大叔母はスワンにピアノを動かすことをたのんだり、譜めくりをさせたりしたもので、ほかのところであんなにもてはやされてゐるスワンその人へのあつかひには、まるで安物同然になんの注意もせずに骨董品のコ

レクションをもてあそぶ子供のわるびれない手荒さがあつた。なるほどそのおなじ時期に社交クラブの多くの男たちが知つたスワンは、大叔母がつくりあげてゐたスワンとは大いにちがつてゐた。後者は、晩に、コンプレーの小さな庭で、小鈴のためらうような音が二つひびいたあとで、祖母につきそわれ、闇の背景に浮かびあがり、声でそれとわかる、暗くてはつきりしない人物に、大叔母がスワン家に関する彼女の知識のすべてでもつて榮養を注入し、活力をあたえてゐたといえるだらう。しかし、生活のいかにもとるに足らぬ事柄についての観点からしても、われわれは、たとえ契約した物品の明細書とか遺言書とかのように、各人がそれを見るだけでよくわかる、誰にとつても同一であるといつたふうに物質的に構成された一個の全体ではない。われわれの社会的性格は他人の思考によつてつくりだされたものなのだ。「知つた人に会ふ」とわれわれが呼んでゐる非常に単純な行為にしても、ある点まで知的行為なのだ。会つてゐる人の肉体的な外観に、われわれは自分がその人についてもつてゐるすべての概念を注ぎこむ、したがつてわれわれが思ひえがく全体の相貌のなかには、それらの概念がたしかに最大の部分を占めることになる。そうした概念が、結局相手の人の頬にそれとそつくりなふくらみをつくり、その鼻にびつたりとくつつけた鼻筋を通してしまひ、その声に、それがいわば振動する二つの透明な膜にすぎないかのように、さまざまなひびきのニュアンスを出させることに